

村松 建夫

見えない絆

きずな



見えない絆

村松建夫

村松建夫（むらまつ・たてお）

1943年、横浜市生まれ。

関東学院大学2年の夏、海に飛び込んだ時、

首の骨を骨折。首から下が麻痺。

頸椎損傷による四肢麻痺

●読者の皆さまへ

この本についてのご意見、ご感想をお待ちしております。

お便りは、左記へお送り下さい。

エフエー出版 編集部

見えない^{きずな}絆

●第7回ありのまま記録大賞受賞作品

定価 一三〇〇円
(本体一一六二円)

一九九一年二月二二日 第一刷発行
一九九二年三月二二日 第四刷発行

著者 村松建夫

編者 社会福祉法人ありのまま舎
理事長 斉藤久吉

発行者 永井晴彦

発行所 株式会社 エフエー出版

〒460 名古屋市中区栄一丁目22-16

電話 〇五二―三三二―一九三五
振替 名古屋五―六一四五一

印刷 製本 日大印刷

©1991

ISBN4-87208-017-3 C0095 P1300E

見えない絆／目次

結婚	7
死線	11
仲間たち	22
キャンパス	28
ケ・セラ・セラ	
トマト	41
和而不同	47
出会い	52
転機	66
すいせん	72
マイホーム	82
家族	92
粗忽な妻	99

パソコン教室 106

月下氷人 112

みちのくへ 125

手紙 131

蔵王 140

親心 143

ベターハーフ 150

見えない絆 161

すぐれた作品に出会う喜び——澤地久枝 167

選ばれた中に——山田富也 171

あとがき 175

見えない絆

本書は、第7回ありのまま記録大賞受賞作品に
更に加筆したものです。

結婚

祭壇を背にした海老坪牧師が「オホン」と小さな咳払いをすると、ザワザワと小波を打っていた礼拝堂の中はシンと静まりかえった。

私の車椅子を押す鈴木君の、仲人としての緊張感が深呼吸と共に伝わってくる。三十分まえのリハーサルではうまくいった。本番は参列者の視線が集まって、どんな表情をしていいのやら、笑いも怒りも出来ず困った。

照れを隠すために、きつと私の顔は怒ったように見えたらう。いや、こんな場合、皆の視線は花嫁に集中するのだそうだ。

讃美歌、お祈り、と続いて式のクライマックスとも言うべき場面が近づくと、私は落ち着かなくなった。バンドでお腹をギュッと締めてあるせいか起立性低血圧に

ならないのが助かる。物も見えるし思考力もある。なのに頭の中は真っ白に近い。

「村松建夫。あなたはこの女子と結婚し、神の定めに従い夫婦となろうとしています。あなたはその健やかな時も、病む時も、この人を愛し、敬い、慰め、助け、その命のある限り堅く節操を守ることを約束しますか？」

「約束します」

この一瞬のために用意したはずの声色だったが、一〇〇〇ccの肺活量では何とも迫力がない。それに引きかえ、紀美枝の一段と澄んだ声が、りと響いて式を締め、親、兄弟、親戚、友人から成る四十人ほどの立会人たちにホツとした空気が流れるのを背中に感じた。

白いヴェールにウェディングドレスを纏い、白いバラのブーケを手にした彼女が別人に見える。もともと若く見られる三十七歳が余計輝いても見える。とても高校生と小学生の母親とは思えない。

彼女のウェディングドレスは自身の手作りである。十年も前に妹のために編みあ

げたものを妹がキチンとしまっておいてくれたものである。よもやそのウェディングドレスが回りまわって作った本人が着ることになろうとは夢想だにしなかっただろう。

結婚式は挙げないというのが二人の暗黙の合意であった。できれば近所の神社にでも報告をというのが二人のささやかな願いでもあった。周りからの勧めがあったにせよ、急に思い立った式と披露宴であった。

「……形式より本質、形より心で……」。宴に先立ち、仲人の鈴木君が、この小さな集いを評して言ってくれた言葉通りに、披露宴はなごやかな雰囲気に進んでいった。

あれほどこの結婚に反対し、「縁を切る」とまで言っていた紀美枝の母親も、穏やかな顔で席に着いている。彼女に対面したのは、彼女が福井から着いた昨夜が初めてであった。心から許しているわけではないらしく、ぎこちない挨拶の言葉を交わしただけだった。

「僕は今のままがいい」と言つて母親の結婚に反対していた高校生の健一も、結局、

私たちに押し切られた形で不承不承、同意した。今は精一杯神妙な面持ちで、チラツチラッと母親の方へ目をやっている。

兄に比べると、新しい父親の出現を歓迎しているかに見える六年生の洋子は、私たちへの関心などそっちのけで、年下の従姉妹たちにテーブルマナーを教えている様子だ。

「あなた達ふたりを世間に認めてもらう儀式、よろしくという挨拶のようなもの。時には形式も必要だよ」

そんな言葉で諭してくれた「大人たち」の論理が、談笑してこの場に臨んでいる人々を目のあたり^{*}にして、納得できなくもなかった。

一生を、病院や施設で送る運命にあった私に、思いもかけない幸運が巡ってきたことを、みんな心から喜んでくれている。車椅子の私を気遣い、さりげなく盛りあげようと一生懸命になってくれている。

「……こんな美しい花嫁を産んで育ててくださったお母さんに、深く感謝します。

そして、十九歳で重い障害を負った建夫が今日あるのは、皆様のお陰だと思っています……」

親代わりである叔父の、参会者への挨拶が終ると、一瞬静まり返った会場は拍手で割れかえった。

死線

昭和三十七年、当時十九歳だった私の中で培われてきた心と体は、その年の夏の一瞬の出来事によって、それからの人生を障害を持つ者として歩まねばならなかった。

大学二年の夏休みも始まり、自動車部品運搬のアルバイトを終えた私は、そのの草野球のメンバーに頼まれて野球道具一式と人員を、車で二十分くらいの所にある

グラウンドまで運ぶことになった。

グラウンドに着いてもメンバーではない友人の小山と私は、うだるような暑さの下での野球観戦にも飽き、すぐ側の海で泳ぐことにした。

近所の人や、子供たちがちらほらと遊んでいるだけの海へ、着替えるのもどかしく駆け出した私は、小さな突堤の上から勢いよく身を躍らせた。

その時、うす汚れた海の中に、Y字型鉄鋼の廃材が突き立っていることなど気づきもしないまま、頭から飛び込んでしまったのである。

飛び込んだ瞬間、頭から爪先まで、とてつもなく強い電流が突き抜けたようにしびれた。頭と首の後ろが、ビリビリと灼けつくように痛い。早く泳いで岸に戻ろうとするのだが手も足も動かない。うつ伏せのまま海に浮くだけである。

（早くしないと溺れる）

そう思った時、激しい首の痛みと共に、身体を上向きにしてくれた小山の真剣な表情がそこにあった。彼のお陰で海水を飲むこともなく岸に引き上げられたが、頭

から吹き出す血が生暖かく首すじを伝わっていく。痛みと息苦しさに、頭の中が入り乱れて声も出せない。自分の身に何が起こったのか、わけもわからないまま、人々の声は遠のき、あたりの景色は私の視野から消えていった。

昭和十八年一月、私は横浜で産声をあげた。

その年は、太平洋戦争の緒戦で戦果を挙げたかにみえていた日本軍が、次第に敗色を深めはじめる年でもあった。

父の正一は横浜の生糸検査所に勤める役人で、母のユキとは昭和十六年に、職場結婚をしていた。

しかし、間もなく日本は戦争に突入していった。父は私の誕生を喜ぶ暇もなく、静岡の連隊に入隊したが、すぐに胸を病んで戻ってきた。

母の看病も空しく、私の一歳の誕生日を前にしてあっけなく父は逝ってしまった。父の死後、日に日にひどくなる空襲の下、母は乳呑み児の私を抱いて逃げ惑い、

戦後には母子二人の生活を始め、大の男でも生きて行くのが困難な時勢に、父と同じ結核に冒された体に鞭打って私を育ててくれた。

そしてその母も、やっと私が小学校へ入るのを見届けるかのようにして、父の後を追っていつてしまった。

その時から、叔父が私の親代わりとなってくれていた。

頭から血を噴いて海面に浮かぶ私を助けてくれた小山からの電話を受けた時、叔父はその場にへたりこんだという。

「首の骨が直角に完全に折れています。一週間はもたないでしょう。仮に一命はとりとめたとしても、首から下が麻痺して手足の機能は失われ、一生寝たきりになるかもしれない」

横浜の病院に駆けつけた叔父は、医師からそう告げられて呆然としたらしい。

幸か不幸か一週間を過ぎても私は生きていた。首は牽引され体は動かせず、高熱の波は何十日も続き、幾度も死線をさまよい、もうろうとした意識は夢と現の境さ